平成26年３月31日

郷土あれこれ

第25号

発行　あきる野市教育委員会　東京都あきる野市二宮350　電話 042-558-1111　FAX 042-558-1560

あきる野市の野鳥

～春から夏に観察できる鳥～

浦　野　守　雄
（あきる野市自然環境調査部会委員）

はじめに

自然環境の豊かなあきる野市は、一年を通じて多くの野鳥を観察することができ、昔から探鳥地として有名です。特に春から夏にかけては繁殖地として東南アジア方面から夏鳥[※1]が飛来し、普段生息している鳥達とともに一年で最も野鳥たちの活動が活発になり、美しい姿を観察したり声を聴くことができる季節です。

あきる野市では平成２１年４月に市民によるボランティアの環境調査部会が発足し、３年間に渡り、自然環境調査が実施されました。子供の頃からこの地域で野鳥を観察してきた私も動物班の一員として調査に参加し、市民の皆さんからも情報提供をしていただきながら、他のメンバーと情報交換し、今までより深く市内の野鳥の動きを把握してきました。

近年撮影した写真とともに、その魅力と観察のポイント、市内での生態などを紹介します。

姿や声が美しい夏鳥

オオルリ

4月後半から５月初旬に渡ってくる鳥で、スズメより少し大きく、雄の成鳥[※2]は頭部から尾にかけて背面があざやかな瑠璃色（るりいろ）で、喉から胸にかけて黒く、胸から腹にかけて白いとても美しい鳥です。雄は林の突き出た高い木の頂上で『ピーリリポイヒーピピ、ピールリピールリジジ』など金属的な美しい声でさえずります。

美しいオオルリの雄

市内では養沢・盆堀・逆沢（さかざわ）・深沢など山間の渓流に沿った林に多く生息しています。その美しい姿と声で日本三鳴鳥（さんめいちょう）の一つに数えられます。

サンコウチョウ

5月の初旬から中旬にかけて渡ってくる鳥で、体の大きさはスズメくらい、雄の成鳥[※2]の尾羽は30cmにも達します。目の周りやくちばしがコバルトブルーで、背中の紫黒褐色に光沢がありとても美しい鳥です。暗い林を好み、背の高い林の中の空間をヒラヒラと舞うように飛翔し、飛んでいる虫を捕食します。数の少ない鳥で、姿を見るには林の中に入って探すことが必要でしょう。さえずりの[※3]『チーチヨホイホイホイホイ』という柔らかな声を『月日星（つきひほし）ホイホイホイ』と聞きなし、三つの光の鳥＝三光鳥（さんこうちょう）の名前の由来となっています。市内では盆堀・逆沢・深沢などに生息していますが、これらの場所も年によって観察できないこともあります。

尾の長いサンコウチョウの雄

※１　**夏鳥**　日本を対象地域とすると、春に日本より南の地域から渡ってきて日本で繁殖し、秋には南の地域に渡って越冬する鳥。

※２　**成鳥**　幼鳥、若鳥、亜成鳥（あせいちょう）、未成鳥などに対する用語で、性的に成熟した繁殖能力のある鳥のこと。多くの種では、幼鳥羽と成鳥羽はかなり異なっている。

※３　**さえずり**　主に繁殖期に小鳥類の雄が雌に求愛するときや縄張りの宣言をするときの鳴き声。

キビタキ

4月後半から５月上旬に渡ってくるスズメくらいの大きさの鳥です。雄の成鳥は頭部から尾にかけて背面が黒く、翼に白班（はくはん）があり、喉元が橙色、胸、腰、眉が黄色の美しい鳥です。背の高い森林内に生息し、飛んでいる昆虫類などを中心に捕えます。オオルリとともに森林を代表する歌い手で『ピーチュリーポッピリリーポッピリリー』などの他『オーシンツクツク』や『チョットコイチョットコイ』など、セミのツクツクホウシやキジ科のコジュケイに似た節回しのさえずりも聞かれます。市内では草花丘陵や秋川丘陵から西部山間部にかけて生息しています。

喉のオレンジ色が美しいキビタキの雄

市街地で観察できる夏鳥

ツバメ・イワツバメ

電線で休むツバメ

ツバメは3月下旬から4月にかけて渡ってくる身近に見ることが一番多い夏鳥です。雌雄同色でひたいと喉元が赤茶色、背中は光沢のある紺色で尾は燕尾型（えんびがた）です。家の軒先などに泥と枯れたイネ科の草に唾液を混ぜておわん型の巣を作りひなを育てます。檜原街道沿いの五日市商店街は昔、燕街道と呼ばれるほど家々の軒下にツバメが巣をかけました。現在は建物の様子も変わり、以前ほどたくさんのツバメを見ることはなくなりました。

壁にとまったイワツバメ

イワツバメは同じツバメ科の鳥で同時期に渡ってきます。背面が黒く腰と腹が白で、ツバメより小型です。飛翔中は腰の白色が目立つので、ツバメと区別できます。巣の形はツバメより入口が狭く、建物の壁や岩壁などに集団営巣します。市内でも学校などコンクリートの建物に営巣している様子が観察できます。

托卵（たくらん）※4をする鳥

カッコウ

5月初旬頃渡ってきます。以前は渡ってくると引田地区の電線の上などで『カッコーカッコー』と鳴く姿やカッコウ同士で縄張りを争う様子も観察することができました。近年は台地部分の開発が進み農地や果樹園が減って生息地として適さなくなったり、托卵相手のモズ、オオヨシキリ、ホオジロなどが減ったりしたためか、声を聞く機会が少なくなりました。

若葉の上にとまるカッコウ

ツツドリ

ツツドリはホトトギスやカッコウより少し早く4月中旬頃渡ってきます。『ポポッ、ポポッ』と２声ずつ、竹筒を打ち鳴らすような低い声が山の尾根筋から聞こえてきます。托卵相手はウグイス科のセンダイムシクイで山間部に多いため生息は市内西部の山間に限られます。

喉をふくらませて鳴くツツドリ

※４　**托卵**　日本ではカッコウ類に見られる行動で、ほかの種の鳥の巣に卵を産み込むこと。その種の親鳥（仮親）に抱卵、育雛を任せてしまう。

ホトトギス

5月初旬頃渡ってきます。カッコウの仲間は姿が似ていますが、声にそれぞれ特徴があります。ホトトギスは夜中から朝方大きな声で『キョッキョ、キョキョキョキョ』と鳴きますが、これを『テッペンカケタカ』とか『特許許可局』と聞きなしたりします。市内には林縁部のヤブなどに托卵相手のウグイスが多く生息しているためか毎年声を聞くことが出来ます。

夜行性の猛禽（もうきん）、フクロウ類

アオバズク

青葉の茂る5月頃渡ってくる小型のフクロウで、大きさはハトくらいです。繁殖期には夕方から朝にかけて社寺林の中などで『ホーホー、ホーホー』と２声ずつの鳴き声を聞くことが出来ます。あきる野市の中で一番広範囲に生息しているフクロウで、橋や道路沿いの街灯にくる昆虫類を採取している姿を目にします。昆虫の他小動物や小鳥も捕ります。街灯の下などにアオバズクが食べた甲虫類の頭部や蛾の羽などが落ちていることがあります。市民のみなさんから寄せられたフクロウ情報で確認に行くとアオバズクであることが多く、フクロウ類の中では確認しやすい鳥です。巣は大きな樹の洞（うろ）を利用します。

獲物を探すアオバズク

フクロウ

フクロウは一年を通して生息している留鳥（りゅうちょう）※5です。体長約50cm、翼を広げると１m程もある大型の鳥ですが、夜行性で繁殖期以外は滅多に鳴かないので、なかなか生息を確認しにくい鳥です。繁殖期に入った３月頃から『ホーホー、ゴロスケホーホー』という声が市街地の周辺や田畑の山際で、夕方から明け方にかけて聞こえてきます。大木の樹洞で繁殖し、狩りの際は他のフクロウ類同様、羽音の出ない翼とするどい爪でネズミやモグラ、鳥類などを捕えます。市内では横沢・盆堀・養沢・逆沢・切欠・草花などで繁殖が確認されています。５月頃には白い綿毛のヒナが巣から出て、親が運んでくる餌を『キチュッキチュッ』と大きな声でねだっている頃です。

ひと鳴きした後こちらを振り向いたフクロウ

オオコノハズク

留鳥で、アオバズクより少し小さい鳥です。目がオレンジ色で、淡灰褐色の体に複雑な模様で頭に耳のように見える羽角があります。森林に生息している数の少ない鳥で、神経質なためフクロウ類では最も観察が難しい種です。ネズミやモグラ類などの小動物や小型鳥類・昆虫などを餌とし、『ヴーヴー・・・・』と低い声で鳴きます。大木の樹洞を繁殖やねぐらに利用し、東京近郊ではあきる野市が数少ない繁殖地の一つです。

ヒナを見守るオオコノハズクの親鳥

※５　**留鳥**　同じ地域に一年中生息し、季節移動しない鳥。

近年見られなくなった鳥

アカショウビン

カワセミ科の夏鳥で、大きさはヒヨドリくらい。雌雄ほぼ同色で、全身が橙褐色でくちばしと足が特に赤く、腰に水色の部分があります。５月後半くらいから谷間に『キョロロロロ・・・・』と尻下がりの雄の声が響き渡り、特徴的な声なので渡ってきたことが分ります。梅雨時の雨の多い時期に良く鳴くので『雨乞い鳥』と呼ばれています。全国的に観察例が減っており、近年は渡りの通過時にまれに声を聞く程度です。

林の梢に現われたアカショウビン

ブッポウソウ

５月初旬から中旬にかけて渡ってくる鳥で、ヒヨドリよりやや大きく、雌雄ほぼ同色で、全身が金属光沢のある青緑色で頭部が黒褐色、くちばしと足が赤い美しい鳥です。飛ぶと翼の白班が目立ちます。近隣の檜原村や青梅市、奥多摩町、八王子市などの繁殖が次々途絶えたあとも、盆堀の神社のスギの樹洞で繁殖していました。それも4年前を最後に東京都内での繁殖は確認できなくなりました。

トンボをくわえたブッポウソウ

ヨタカ

太い枝に沿ってとまり身を隠すヨタカ

5月の初旬ころ渡ってくるハトより小さく細身の鳥で、雌雄ほぼ同色、色は全身に灰色と黒と茶の混ざった樹皮に似た複雑な模様です。夜行性で日暮れから活動し、雄は木の枝の上や飛びながら『キョキョキョ・・・・』と長く続けて鳴きます。子供の頃親に連れられ山仕事の手伝いに行くと、毎年必ず同じような場所で卵を抱いている親鳥やヒナの姿を観察することが出来ました。最近は夜観察に出かけても、なかなか声を聞くこともなくなってしまいました。

おわりに

市内には他にも多くの種類の野鳥が生息しています。近年環境の変化とともに、以前はたくさん見られた種の数が減ったり、確認できなくなったりしています。一方で外来種であるガビチョウやソウシチョウの生息が多く確認されるようになりました。

野外で観察していて、オオコノハズクが同じ巣穴を使うムササビと樹洞（じゅどう）の取り合いをしている場面や、オシドリがムササビに巣材や卵をかき出され、途中で繁殖を中断してしまう様子など毎年目にしています。これは近年樹洞のある大木が減ったことが大きな原因です。こういったフクロウ類や小動物との巣穴の取り合いは、それぞれに適した巣箱を設置し管理することで、繁殖の手助けが出来るかもしれません。これからは様々な場面で、ただ見守るだけでなく積極的に保全していく必要性を感じています。

参考文献

山渓ハンディ図鑑７　日本の野鳥　　山と渓谷社

あきる野市自然環境調査報告

（平成21年度～平成23年度）　　あきる野市